

## 青森県のウミガメの民俗

— 江戸時代の流木と現在の甲羅・剥製祭祀習俗を中心に —

藤井弘章

はじめに

青森県では青森県立郷土館による民俗調査、および青森県史の民俗調査が進められてきた。その結果、県内における民俗調査報告書が多数刊行されている。これらの報告書の中にウミガメに関する報告も見られる。大正から昭和初期にかけて、青森県の郷土史・民俗研究をおこなった中道等も、ウミガメからもらった霊木の話を報告している〔中道 一九二五〕。筆者も『民俗文化』二二五号において、八戸市の事例を紹介した〔藤井 二〇一三c〕。しかし、まだ青森県全体を見渡してウミガメの民俗をまとめたものは見られない。筆者は平成一七年（二〇〇五）九月に下北半島の佐井村・大間町・風間浦村、平成二四年（二〇一二）八月に八戸市、平成二六年（二〇一四）八月に津軽地方の深浦町・鯨ヶ沢町・五所川原市・今別町において、聞き取り調査をおこなった。また、平成二六年（二〇一四）八月には、弘前市立弘前図書館において文献調査もおこなった。

### 一 ウミガメの生態

青森県の海岸でウミガメが産卵することはない。ウミガメは暖かい海の生き物であるため、太平洋側では福島県から宮城県、日本海側では石川県付近より以南で上陸・産卵する。ただし、青森県近海でもウミガメの回遊は見ら

れる。青森県の生物学を牽引してきた和田干蔵は、青森県近海でもアオウミガメはよくいるという〔和田 一九五七〕。しかしながら、青森県におけるウミガメの研究は筆者が確認した限りでは見いだせなかった。

## 二 流木の習俗

中道等が大正一四年（一九二五）に刊行した『津軽旧事談』には、「亀から霊木を貰った話」という一節がある〔中道 一九二五〕。江戸時代、弘前の左官が深浦へ行く途中にウミガメを助け、帰り道にウミガメから霊木を貰ったという話である。中道は「もはや忘れられたりとする譚りの一つ」として紹介しており、大正時代にはすでに語り伝える人はほとんどいなかったという。しかし、複数の津軽の文献に記述されていることから、江戸時代には相当有名な話であったようである。中道は、『永禄日記』、『津軽旧記抄』、『平山日記』、『岡島忠甫の聞書』、『谷の響』、『工藤家記』、『一話一言』、『正長家記』、『津軽俗説撰』をもとに、この話を紹介している。

カメから霊木をもらった人の名前は文献によって異なり、年代も異なるという。話の大筋は同じであるが、文献によって若干の差異があるという。筆者は弘前市立弘前図書館において、中道が参照している文献の確認作業をおこなった。しかし、すべての確認はできなかった。中道が記している文献の名前と、現在呼ばれている資料名が異なっているものもあった。筆者は弘前市立弘前図書館において、『津軽歴代記類』、『永禄日記』、『平山日記』、『津軽旧記類』、『津軽俗説撰』、『津軽編覧日記』、『封内事実苑』を閲覧した。『谷の響』については、現地調査前から複写を持っており、『一話一言』については、『日本随筆大成』に入っているため、近畿大学図書館にて閲覧した。

『永禄日記』は、浪岡城主北畠氏の後裔、山崎氏が代々書き綴ったもので、永禄年間から書き始められたことが書名の由来となっている。写本・異本が多い。『平山日記』は、五所川原市の平山家の家記である。『工藤家記』は、工藤源左衛門行一（一七八五―一八四六）の編集した津軽藩の編年史で、弘前図書館では『封内事実苑』と呼

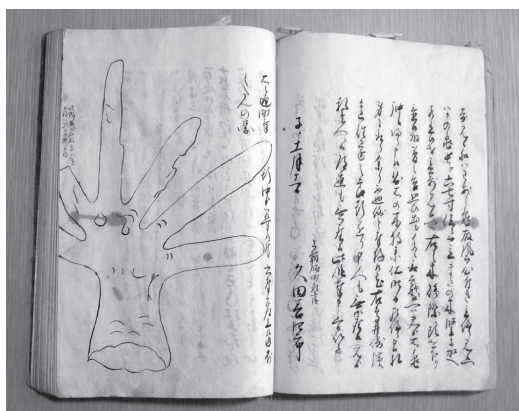


写真1 『津軽編覧日記』(弘前市立弘前図書館所蔵)

ばれている。『谷の響』は、平尾魯仙(一八〇八～一八八〇)が津軽領内の心霊・妖魔に関する異談奇聞を集めたもので、万延元年(一八六〇)に成立している。『津軽俗説撰』は、弘前本町の油商が民間の俗説を書き記したものである。『一話一言』は、幕臣の大田南畝(二七四九～一八二三)が記した随筆集で、安永八(一七七九)年に起稿し、文政三(一八二〇)年に成立した。

中道が参照している文献のうち、『津軽旧記抄』、『正長家記』については分からなかった。ただし、中道によれば、『津軽旧記抄』には、霊木を拾い上げた本人の「口上書之覚」が載っているという。また、同じ文献かと思われる「旧記」には霊木の図が載っているという。弘前図書館の方に探していただいたところ、中道が記している『津軽旧記抄』の内容とほぼ同じことが書かれた文献を見出すことができた。『津軽編覧日記』と呼ばれる文献である。『津軽編覧日記』は、木立要左衛門(一七二六～一八〇二)が寛政四年(一七九二)三月に藩の命令によって日記物書成田寅之助ほか数人の協力で編集し、翌五年二月にその稿が成ったものである。

『津軽編覧日記』には、「口上書之覚」とともに、「ぼくたんの図」も載っている。また、筆者が確認した文献のなかでも、このできごとについての説明は詳細である。中道は口語訳で引用しているため、ここに該当部分を引用しておく。<sup>(1)</sup>

一 十一月七日鞘師町左官久田屋善四郎と申者、去月十七日西浜江用事有之罷下り候処、鳥井崎村二而龜を薦こめと申鳥つゝき、右龜半死二成候処助け候得は、其夜中告二而ほくたんと申靈物を龜よりさつかり持參致候、右之趣御尋二付同人より口上書添差上候処、御取上ケ御目錄被下置候、其形人の拳の指形の如五ツ有之、右口上書差上候文言之写、

口上之覺

私親類深浦越後屋善右衛門と申者方へ用事御座候而、先月十七日同所江罷越候処、鰯ヶ沢上磯鳥井崎と申所之浜辺二而、長ケ三尺余之龜岡江上り、鳥井二こめと申鳥三拾羽程、右龜二取付罷有候処、私通り懸り一見仕候処、右之龜首引込罷有候か、私立寄見候得は、其俣首差出泪を流す体二而、助け呉へと申さぬ斗二相見得候故、鳥を追払右龜私壺人二而、漸々水際江入レ候へハ、心嬉そふの体二而沖江出申候、則晚深浦善右衛門宅江着仕候而、夜中寝入申候処、夢中二不思議成事御座候、

一、則晚夢二十七八歳之若衆来り、今日於浜辺御助ケに預り候龜二御座候、以御影一命相助り難有仕合二御座候、私儀龍宮界より来り候、然は私今日御助二預り申候故、親江右之段咄シ候処、切々忝次第、何か御礼可申、手前二三本之宝木有、右之内二両脇二有内一本可進と親申候得共、殊之外小木二御座候故真中之大振一本進申度段親江申候処、左候ハ、大振進申候様二親申事御座候、此木之徳ハ人間一人二目形五厘ンあたへ候は長命致候、又此木之名はぼくたんと申木也と告知せると覺夢さめ申候、夫より廿一日之間深浦に逗留仕用事相達、当月七日先達而罷通り候浜辺、鳥井崎と申所を罷通り候処、遠沖より波たゝへ角の有蛇の様成物来る体二相見得、殊之外恐ろしく暫逃申候へ共、右之者近く成候故、立寄見候処ハ、已前之龜故ふと心付き、立歸り見候へハ、かの亀長ケ六七寸位二而立、またの木堅に加へ罷有候を立寄見候へハ、右之木磯際二頭を下ケ置候故、夢之告思ひ出シ、手に取戴キ候へハ、夫より右龜沖江歸り申候、則右の木持參仕、昨日罷歸り申候、私身

に取り余り不思議と奉存候、尤右鳥井崎浜辺往還之節、行懸り申人も無御座候、元より私売人二而道連も無御座候、此段奉申上候、以上

子ノ十一月十一日

上鞆師町左官

久田善四郎

右木丹長サ八寸少余、横幅七寸位、地ハ古き皮の様成色二而茶色にて手ざわりハ羅紗の如成物二御座候、又木の耳杯江さわる様にも有之、形は人の手の指の様にて海松の大キ成る如し、此図ハ木丹を置写し候図也、右木丹江差上候二付、子十二月三日之晩右善四郎江為御祝儀金子五百足御熨斗御添被下置候、

右木丹江戸江御登せ被遊候処、翌丑年松平大和守様御奥様江此方様御奥様より御見せ被成候処、それより諸方江御見せ被成候処、風説広く相成上様江も相聞へ、

公義御主殿江御上ケ被成候処、被遊上覧御望二付少々御そぎ取被遊候由、其後御屋敷江御返被成候処、急二桐之箱出来被仰付、紫縮緬之服紗二而包、又大和守様江被遣候、其節左官より差出候口上書も認直シ相添被遣候由、宛所大坂屋万右衛門様左官長四郎と書付有之、右二付江戸中大評判二而右之儀漢文二相記所々二而翫ふ、板行二も出ると言

『津軽編覧日記』には、「ぼくたんの図」の図も掲載されている（写真1・2）。なお、この部分には、一枚もの

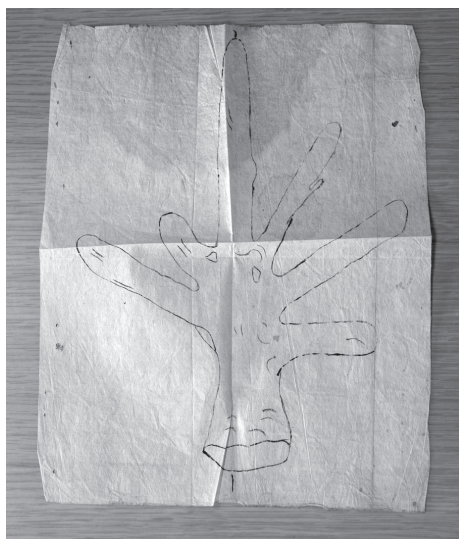


写真2 『津軽編覧日記』の「ぼくたんの図」  
（弘前市立弘前図書館所蔵）

の図が挟み込まれていた（写真2）。ここには、以下のような言葉が記されている。

「右之通町奉行中より尋候二付、書付差上候由ぼくたんの図」

「此所長ク候処脇方へ見せ候得ハ折候而返し候由」

つまり、五本の枝のうち、左から二本目はもつと長かったが、折られたという。

『津軽編覧日記』に書かれている内容を簡単にまとめると以下になる。明和五年（一七六八）一〇月一七日に、弘前の左官である久田善四郎が深浦の親戚の家へ向かう途中、鳥井崎において、ウミガメが鳥につつかれているのを見つけて助けた。善四郎は深浦の親戚の家で滞在中、夢にカメが現れ、助けてくれた御礼に「ぼくたん」という宝の木を差し上げたいという。善四郎は弘前への帰り道、十一月七日、再び鳥井崎を通りかかったところ、カメが海から現れ、夢で語っていた木をもってきた。善四郎はその木をもらって弘前に帰った。善四郎はこの木を藩に差し出し、祝儀金をもらう。翌年、「ぼくたん」は江戸に持って行かれ、江戸中で評判になり、將軍なども見ることとなった。將軍は「ぼくたん」を少し削り取って津軽藩に返した。

最も詳しい記述となっているために『津軽編覧日記』を紹介したが、文献によつて記述内容には若干の差異がみられる。すべての文献を紹介することはできないが、『津軽編覧日記』とは対照的に簡略な記述となっている『平山日記』の該当部分を以下に引用しておく。

弘前の左官善九郎と申者深浦の方へ参候処、磯辺二大亀有、諸鳥集り是を啄殺ツツキんと致候を助ケ、其歸路に右の所を通り見候処、右の亀三尺余の木を加へ、磯辺江上て海江歸しを見て、磯辺より取来りて、弘前へ歸り上え差上候所、何と申ものと相知兼、近衛様へ差上候処、是ハ木攤と申重宝のよし、依之江戸にて其趣を板行し候由、扱右の左官えハ生涯式人扶持被下置候。

こうした点に注目していくつかの文献を比較しておきたい。まず、カメから木をもらった年月については、『津軽編覧日記』・『封内事実苑』では明和五年十一月七日、『一話一言』・『津軽歴史代記類』・『津軽旧記類』では明和六年八月、『永禄日記』・『平山日記』では明和七年、『谷の響』では明和年間、となっている。カメから木をもらった人物名は、『津軽編覧日記』では左官久田善四郎、『封内事実苑』では左官久田屋善四郎、『平山日記』では左官善九郎、『永禄日記』では左官の何某、『谷の響』では左官左五郎、『津軽俗説撰』では左官の善次郎となっている。さらに、『一話一言』・『津軽歴史代記類』・『津軽旧記類』では左官ではなく百姓となっている。

夢でのカメのお告げの有無、および、木の名前を知った時期については、『津軽編覧日記』と『封内事実苑』は



写真3 鳥井崎（2014年8月撮影）



写真4 鳥井崎の看板（2014年8月撮影）

概要は同じであるが、『平山日記』は明和七年のできごとになっている。また、カメからもらった木の名前は、夢のお告げで聞いたのではなく、藩に提出してから、近衛家から教えてもらったとしている。このように、『津軽編覧日記』と『平山日記』を比較すると、カメから木をもらった年、カメから木をもらった人の名前、夢でのカメのお告げの有無、木の名前を知った時期、などに違いが認められる。

ほぼ同じで、夢にカメが現れて「ぼくたん」（『津軽編覧日記』）もしくは、「木丹」（『封内事実苑』）を差し上げると告げている。『平山日記』・『永禄日記』では、夢でのカメのお告げは見られない。『平山日記』では、木の名前は近衛家に教えてもらったとしている。『谷の響』も、同じく近衛家から教えてもらったとしている。『永禄日記』では「上へ差上候へ共何と云木と云ふか不知、其後木たんと申木之由二而、江戸表江御持せ被遊候由承伝候。」とあり、やはり藩に提出しても木の名前は分からず、後日になって名前が分かったという。また、カメを助けてから、カメから木をもらうまでの日数についても文献によって異なる。『津軽編覧日記』に掲載される善四郎の口上書では、一〇月一七日に鳥井崎でカメを助け、二日間、深浦に逗留したあと、十一月七日に再び鳥井崎を通ったときにカメから木をもらったとしている。『封内事実苑』では、深浦に「十余日」逗留後に木をもらったという。『一話一言』・『津軽歴代記類』・『津軽旧記類』では、カメを助けた翌日に木を拾ったとしている。『平山日記』・『永禄日記』では明確にいつとは記されていない。

これらの文献を総合的に検討すれば、以下のようなことが推測される。『津軽俗説撰』のように、左官の「虚談」であると断言しているものもあるが、左官が木を拾ってきたことは事実である。また、ウミガメの民俗を考えれば、カメから宝物をもらった話などは各地にあることから、単なる虚言と断定することはできない。

ただし、伝聞によって広まったため、文献によつてさまざまな書き方がされている。『一話一言』の著者は、江戸の幕臣であるため、江戸での伝聞によって書いた内容となっている。『津軽歴代記類』・『津軽旧記類』は『一話一言』の引用である。脚色は排除していると思われるが、『一話一言』・『津軽歴代記類』・『津軽旧記類』は、伝聞により変化した内容を記していると思われる。一方で、『津軽編覧日記』は、善四郎の口上書および「ぼくたん」の図も掲載しており、記述も詳細であるため、一次史料に近いように思われる。『封内事実苑』は、口上書や図は見られないものの、文章の内容自体は『津軽編覧日記』に近い。しかし、『津軽編覧日記』・『封内事実苑』の内容

を一次史料と断定することはできない。『平山日記』・『永祿日記』についても、簡潔にできごとを記しており、伝聞によつて変化した部分は少ないと思われるからである。『津軽編覧日記』・『封内事実苑』と『平山日記』・『永祿日記』の最も大きな差異は、木の名前をいつ知ったのか、という点である。この点だけを比較すれば、夢でカメのお告げがあったというよりも、近衛家に教えてもらった、という記述のほうが信頼性は高いように思われる。これについては、口上書の性格を考慮しておく必要がある。『津軽編覧日記』には、江戸において木が有名になった際、木を入れる桐の箱が整えられ、紫縮緬の服紗に包まれるようになり、善四郎の口上書はしたためなおされて木とともに添えられた、と書かれている。明らかにカメからもらった木を霊木化する意向が働いていることが分かる。たまたま、帰りにカメがもつて来た木を拾ってきた、なんという木か知らない、というのではなく、夢でカメがお礼を述べて龍宮の宝の木を差し上げると告げた、としたほうが霊木としてのありがたさは増すであろう。將軍および諸大名が閲覧する名物の木となったため、江戸において、善四郎の夢については誇張され、修正された可能性がある。善四郎の名前が変化しているのも、霊木を拾うにふさわしい人物に仕立て上げるという意図があったかもしれない。

これだけ有名になった霊木であるが、その後の消息は分からない。大正時代にこの話を紹介した中道等は「木攤」の行方を探している。「木攤」で作った印材で形を押した紙をもらっただけで病気が治ったという程度の話がありそうであるというが、いまだにそのような話は見つからないという。

筆者の現地調査においては、文献の確認のみならず、カメの霊木に関する伝承がどのように伝わっているか、聞いて回った。善四郎がカメに出会った鳥井崎は鰺ヶ沢町から深浦町に入ったあたりにある（写真3・4）。鰺ヶ沢町、深浦町ともに、郷土史家の人は、カメの霊木の話は知っていた。ただし、言い伝えて聞いているのではなく、調べて知っているという。『深浦町史年表』には、このできごとが記されている（「深浦町 一九八五」。また、『ふ

かうら風土記』には地元の古老から採集した「亀の恩がえし」という昔話が掲載されている〔西崎 二〇〇〇〕。これは、以下のような内容となっている。（筆者要約）

深浦の長四郎という人物が、浜辺でカラスなどにつつかれていたのを見つけて、カメを助けた。その晩、カメが夢に出てきて、カメが不老不死の霊木を差し上げたいと言った。翌日、長四郎は浜辺でカメがもって来た霊木を拾った。長四郎は庄屋に話したところ、津軽の殿様に献上したほうがいい、ということになった。長四郎は霊木を献上して、褒美をもらった。霊木は江戸の将軍に献上され、少しずつ削り取られたので、なくなってしまう

たのではないか。



写真5 鮫の集落（2012年8月撮影）



写真6 浮木寺の観音（2012年8月撮影）

江戸時代の文献から確認できたできごととおおよそ同じ内容が、深浦でも言い伝えられていたことが分かる。ただし、カメから霊木をもらったのは深浦の人物となっている。ただし、筆者が深浦で聞き取り調査をおこなったところ、この伝承を言い伝えとして聞いている方に出会うことはできなかった。

八戸市鯨の浮木寺には、ウミガメの流木に関する事例がある。すでに、『民俗文化』二五号で取り上げたのでここでは簡単に触れておく〔藤井 二〇一三c〕。天保六年（一八三五）に書かれた「蕪島之記」や、嘉永年間（一八四四～五三）に描かれた「八戸浦之図」によると、鯨浦の船頭の喜八は、霊夢を見て、海上でカメが乗っていた流木を拾い上げ、観音を刻んだという。寺を建てたのは寛延二年（一七四九）となっている。この観音は鯨の浮木寺に今も残っている（写真5・6）。明治時代に書かれた記録によると、宝暦七年（一七五七）、鯨浦の船頭嶋脇喜八が霊夢を見て、海辺で漂流してきた浮木を拾い上げ、この木で観音を刻んだという。この縁起ではカメは出てこない。年代も少しあとのこととなっている。いずれの年代においても、明和年間の津軽の事例よりも少し前に、八戸で流木が拾い上げられていることになる。

### 三 見世物

江戸時代、珍しい海洋生物が上がると都会へ運ばれて見世物にされることがあった。江戸・名古屋・大坂などでは、アザラシ・サンショウウオなどが見世物になることもあった〔名古屋博物館 二〇〇二〕。津軽ではウミガメが産卵に上陸することがなく、ウミガメに出会うことが珍しい。大きなウミガメが上がると見世物になったようである。明和元年（一七六四）六月に津軽の西の浜（津軽半島の西海岸）に上がった大きなカメを弘前まで持ってきた、という記録が残っている。『永禄日記』には「六月西ノ浜より八尺程之大亀弘前へ上ル。此後愚民之咄ニハ是ハ竜宮之使也、然る所不返而殺す故此後肴不足なるべしと。」、『平山日記』には「六月西浜より八尺程の大亀弘前へ上る人々見物」と書かれている。

#### 四 放流習俗



写真7 舟岡の集落（2014年8月撮影）

捕獲目的ではなく、網にウミガメがかかった際に、漁民たちはウミガメを海に放すという習俗がある。あるいは、浜に上がっているウミガメを海辺の人々が見つけたときも、海に戻れないウミガメを戻してやる、ということもある。こうした際、人々はウミガメに酒を飲ませることがあった。今のところ、江戸時代の文献からは、木をもらう事例と、見世物にする事例は確認できるが、酒を飲ませて放したという事例は見出していない。中道等によると、「今でも少々大きなものを見ると大に酒を振舞ひ、背に六字の名号を朱で書いてやる昔乍の風を見る」という〔中道 一九二五〕。津軽では大正時代に、ウミガメに酒を飲ませて放流する習俗がおこなわれていたことが分かる。ウミガメに出会うといつでもおこなうのではなく、大きなウミガメの場合に酒を飲ませたようである。また、背中に六字の名号、つまり「南無阿弥陀仏」を朱書きしたという点も特徴的である。

和田干蔵も青森県のこととして、「体躯が大きく格別なすがたが漁夫たちの眼に映ずるので、昔から酒を吞まして無事長久を祈って放流する」と記している。ただし、和田は「酒を吞んだ亀は必ず死に、次の漁場で屍が浮んでいることが普通のようなものである」とも述べている〔和田 一九五七〕。県内各地で同様の習俗は報告されている。青森県の民俗学者・森山泰太郎氏が昭和二五年（一九五〇）に執筆した津軽半島沿岸漁村のフィールドノート「津軽の海村」には、深浦町沢辺（旧岩崎村沢辺）の事例として、「亀が入ったことがあった。酒を飲ませて放してやる。獲ればよくないといふ」との記録がある<sup>(2)</sup>。青森県立郷土館の調査報告書『陸奥舟岡の民俗』

には、外ヶ浜町の事例として、「亀は竜神様の使いだといって、網にかかると、岡まで船に乗せてきて運んできて、酒を飲ませてから、海に返す。返すときには、漁師が全員、浜に出て亀が見えなくなるまで拌んで見送りする」と記されている〔青森県立郷土館 一九七八〕。

下北半島の脇野沢村の事例は『脇野沢村史』に詳しく紹介されている〔脇野沢村史調査団 一九八三〕。以下、要点を引用しておく。脇野沢村では、カメは龍神様のお使いといい、網にかかったカメは浜まで連れてきて酒を飲ませる。一升は平気で飲んでしまうといい、カメは酒が好きという人もいる。酒を飲ませたのち、甲羅に「大漁祈願」という文字や、捕まえた人の名前を、彫ったり墨で書いたりすることもある。再び船に載せて沖で海に帰す。このとき、「魚を連れてこいよ」、「大漁させてくれるよ」と言葉をかける。脇野沢村九艘泊では、カメを捕まえると家まで連れてくる。神棚の下に机を置き、その上にカメを載せて酒を飲ませる。「カメは万年」といい、家が栄えるように願う。カメの飲み残しの酒を飲むと長生きするという。同村瀬野では、カメを捕まえると家まで連れてくる。弁天島の近くまで連れて行つてカメを放す。また、瀬野では次のような事例もあったという。弁天島の近くに建てていた網に大きな網がかかった。大きなカメであつたので、家まで運ばずに浜で酒を飲ませて帰した。網を建てている家は龍神と稲荷を祀っていた。後日、その家の稲荷の命日にサンマやサマが祈祷をしたとき、そのカメが降りて「ここの家の龍神様に会いに来たのに、龍神様に会わせないで皆のさらしものにした。今度来たときは座敷に上げて龍神様に会わせてくれ。」と語つた。

風間浦村蛇浦の事例は、『蛇浦の民俗調査報告書』、『風間浦村の神社・仏閣』に出ている〔青森県立郷土館 一九八八、澤田 一九九三〕。網にカメがかかることは、縁起がよく、大漁の前兆といわれ、カメに酒を飲ませて海に放してやる風習は昔からあつた〔澤田 一九九三〕。

このほか、『下北半島北通りの民俗』、『青森県史 民俗編 資料下北』では、下北半島北通りの事例がまとめら

れている〔青森県環境生活部文化・スポーツ振興課県史編さん室 二〇〇二、青森県史編さん民俗部会編 二〇〇七〕。風間浦村蛇浦以外の事例としては、風間浦村易国間と大畑町本町の事例が紹介されている。風間浦村易国間では、網にカメが入るとカメに酒を飲ませて海に帰した、といい、大畑町本町では、生きて捕まえたカメは酒を飲ませて海に戻す、という〔青森県環境生活部文化・スポーツ振興課県史編さん室 二〇〇二〕。

筆者は平成二六年（二〇一四）八月に津軽地方でこの習俗の確認調査をおこなったところ、深浦町、鰺ヶ沢町で事例を聞くことができた。深浦町深浦の漁民・田中昇氏（昭和一九年生まれ）は、以下のように語る。

生きていれば酒を飲ませて放す。昔からそういう習慣がある。今でもそう思う。オカまで持つてくる。縁起がいい。カメは縁起もん。

田中氏に甲羅に何か書かなかったか、という聞いたが、何も書かなかった、ということであった。鰺ヶ沢町舞戸町で「亀神社」を祀る杉澤むつ子氏によると、浜毛の漁民は、網にカメがかかると、一升ビンで酒を飲ませて放した、という。次の日は大漁であった、という。

平成一七年（二〇〇五）九月に下北半島で調査したおりには、佐井村、風間浦村で、同様の習俗のことを聞いた。佐井村牛滝の漁民の妻である竹内キヨ氏（昭和二年生まれ）は、以下のように語る。



写真8 牛滝の港（2005年9月撮影）

網にかかったウミガメは生きていれば酒を飲ませて海に帰す。カメは酒が好きだということで、酒を持っていて背中の中甲羅からかけて飲ませた。

牛滝の漁協に勤めていた野村義勝氏（昭和四年生まれ）は、以下のような言い方をする。

「カメ捕るもんでねー。魚呼んでくる神様だ」という気持ちがあった。

佐井村福浦の漁民・柳田市雄氏も、カメは縁起物で、生きていれば酒を飲ませて放す、という。風間浦村蛇浦の漁民・亀谷重一氏も、カメが網に入つて、生きていれば酒を飲ませて放す、という。

#### 四 甲羅・剥製を祀る習俗

青森県では、『脇野沢村史』、『蛇浦の民俗調査報告書』、『風間浦村の神社・仏閣』、『下北半島北通りの民俗』、『青森県史 民俗編 資料下北』に、ウミガメの甲羅や剥製を祀る習俗が報告されている（脇野沢村史調査団 一九八三、青森県立郷土館 一九八八、澤田 一九九三、青森県環境生活部文化・スポーツ振興課県史編さん室 二〇〇二、青森県史編さん民俗部会編 二〇〇七）。いずれも下北半島の事例である。筆者はこのうち、佐井村・大間町・風間浦村の事例について、平成一七年（二〇〇五）九月に確認調査をおこなった。本稿では、筆者が調査をおこなっていない事例も含めて、南から順に取り上げておく。

## 1 脇野沢村

脇野沢村新井田の松浦源蔵家では、沖で拾ったカメの死骸を「龍神様」として祀っている。祠を建てて祀っているという。『脇野沢村史』には「最近、海に浮いていたカメの死骸を見つけて持ち帰り」とある〔脇野沢村史調査団 一九八三〕。昭和五〇年代のことと思われる。ただし、現地調査による確認はおこなっていない。

## 2 佐井村

『下北半島北通りの民俗』には、佐井村牛滝の事例として、網にかかったウミガメの剥製を五頭所有している家がある、と記され、家の中に祀っているウミガメの写真も掲載されている〔青森県環境生活部文化・スポーツ振興課県史編さん室 二〇〇二〕。筆者が佐井村教育委員会と青森県史編纂室に問い合わせたところ、『下北半島北通りの民俗』に掲載された事例は、佐井村漁業協同組合副組合長を務める竹内英輝氏の家であることが分かった。この情報をもとに、平成一七年（二〇〇五）に現地調査をおこなった。



写真 9 竹内英輝氏の家のウミガメ（2005年9月撮影）



写真 10 漁協に寄贈したウミガメ（2005年9月撮影）

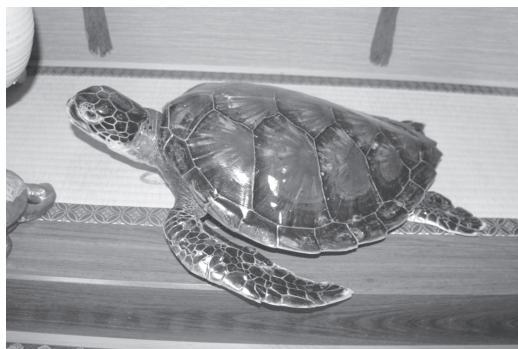


写真 11 竹内浩義氏の家のウミガメ（2005 年 9 月撮影）



写真 12 竹内英輝氏の家のアカウミガメ（2005 年 9 月撮影）

牛滝の竹内英輝氏の家では、二階の床の間の手前にウミガメの剥製を六頭祀っている。四頭はケースに入れて安置している。ケースの中には四段の棚を設置し、それぞれの棚にウミガメを置いている。そのケースの外側に、二頭のウミガメを安置している。一頭はアオウミガメ、一頭はアカウミガメと思われる。英輝氏の母親である竹内キヨ氏（昭和二年生まれ）にカメの話をうかがった。

昭和五〇年ごろから一年おいて捕った。カメは酒が好きだということで、酒を持って行って背中の中羅からかけて飲ませた。次の年、いいカメ捕ってきたといって、カメの口に酒っこ塗った。

生きていたカメは酒を飲ませて放す。死んだのは青森に持って行って剥製にした。組合にも小さいのをひとつあげた。去年も小さいカメを捕って剥製にした。マグロ八本も捕った。カメを捕れば大漁する。

マグロは大間へ持っていけばもっとお金になったのに、青森へ持って行ったのであまりお金にならなかった。

死んだじいさんが青森の占い師に行ってみたところ、占い師はこ

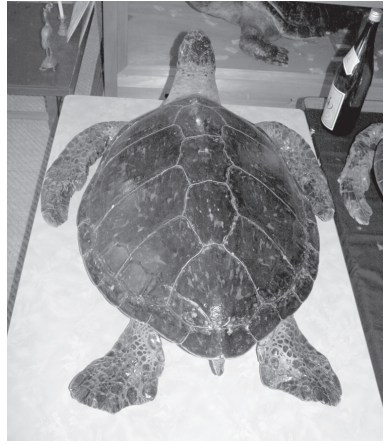


写真 13 竹内英輝氏の家のアオウミ  
ガメ（2005 年 9 月撮影）

のカメは親子だから離さないでくださいといった。それで  
ケースをこしらえた。

一二月五日にカメのお祝いをする。五日エビスコ。大漁  
する命日。カメが一頭捕れば漁する。人の何倍と漁する。

キヨ氏の夫がウミガメを剥製にするようになったというこ  
とであるが、夫はすでに亡くなっていた。竹内英輝氏にもウ  
ミガメを祀るようになった経緯をうかがった。

カメは甲羅に苔が生えていて、この辺では重宝しなかった。昔からカメがいることは聞いていたが、網に入っ  
たのは聞いたことなかった。昭和五〇年ごろ、網を拡張して大型化した。この時期カメがよく網に入った。生き  
ていれば酒を飲ませて海に帰すが、ほとんど網の中で窒息死している。

昭和五〇年ごろ、甲羅だけ網に入った。頭はなかった。においが激しく、海に捨てたが、捨てるたびに二・三  
度寄ってきたので、誰も知らないところへ埋めた。三年たつて、昭和五三年ごろカメが網に入った。これが剥製  
にした最初のもの。ケースに入っている一番下のカメ。ケースの中のカメは下から順に入れている。

その後は一年おきにカメが入った。三頭目が入ったとき、青森の占い師に相談した。青森の神社の宮司さん。  
イタコとは違うが、カミオロシの人。今後のことをアドバイスしてくれる人。女性。弟の家が新築したので、床  
の間に飾るようにカメを一頭あげようかと思つたが、その人に、このカメは親子だから離してはいけないと言わ  
れ、自分の家に置くようにした。

明石で放した標識がついたカメも捕った。夏だったか。これは組合事務所に飾ってある。漁協にあげたカメは四頭目。新しい理事だったので、記念にくれといわれて、家に三頭もあるし、いいと思ってあげた。これは剥製にするために、組合で函館に持って行ったか。

黒いカメ（筆者注…アオウミガメ）を捕る二年前、息子にあげたカメを捕った。剥製屋を探すのに二年ぐらい冷凍した。前に頼んでいた人は動けなくなっていたので、新しい剥製屋を探した。漁協にあげたカメと、息子にあげたカメは、小さいカメだから別と思つてあげた。

黒いカメは去年の八月ごろに捕った。九月過ぎれば低気圧が来る。二日に一回は西風と北風が吹く。海が荒れて海藻がなくなる。あとのカメは一月から一月中旬。捕ったときは最初サケを捕っていた。このとき、マグロを二〇〇〇万ぐらい捕った。黒いのはよほど海藻を食べていた。ホンダワラ、ウミソーメンを食べていた。こんなに食べるのかというくらい口に入っていた。

牛滝の人で、自分より以前に剥製にする人はなかった。剥製にするには一頭一〇万から一五万ぐらいかかる。三・四か月かかる。青森の剥製屋にカメの剥製を頼んだ。この人で一五・六頭やつてもらった。海から上げると腐るので、すぐに剥製屋に持つていく。剥製屋の都合がつかなければ冷凍する。氷で全部くるんで冷凍する。

剥製屋がカメの肉を食べませんか、と言ったが食べなかった。肉は紅色をしていた。牛滝の人でも、戦前に南方へ行った人は食べた人がいる。「亀は万年」というので、カメは剥製にして飾っておきたいと思つていた。先にカメを捕った人は持つてきても関心なかった。竹内氏は、函館の居酒屋で、カメの甲羅を盃にしているのを見て、これはいいもんだと思つていた。それから飾りたいと思つていた。

牛滝以外の人にも剥製にするところを教えて、一二・三頭は世話している。大間、川内、脇野沢の人でも世話した。佐井村では福浦、磯谷、佐井の人を世話した。福浦で剥製にするようになったのは、牛滝よりもあと。カメ

の数が多くなつた時期に剥製にした。最近は捕れない。矢越の神社にはカメの剥製がある。このカメは矢越で昔捕つたもの。昭和五九、六〇年ごろ見たときには古ぼけていた。今度捕れば奉納するという約束をしている。カメは向こうの方が大きかった。

カメは一年に一回、反対にして土用干ししている。結構手入れは大変。夏に土用干しする。ケースに入れないと甲羅が痛む。家を改築する予定なので、カメの部屋を作りたいと思っている。

このカメは大漁の神様。カメ一頭で五〇〇〇万から六〇〇〇万の収入があつた。一〇〇トンから一二〇トンの魚が捕れた。「カメは宝」。

カメを捕つてきたときには、神棚にお神酒をあげて、「今日、カメを捕つてきた」という。神棚の下に置くのは剥製にできてから。近所の人や子供を乗せて写真を撮つた。二階にあげるのは友引を選ぶ。カメは大漁を呼んでくれるので。カメはだいたい五〇キロぐらいある。

一二月五日にエビスコをする。手伝いの人を呼んで宴会をする。この日をカメの命日になっている。

カメが捕れるときは、潮回りがいいのか、カメが乗るところは魚も捕れる。カメが乗るときは環境が整っているのか。カメが網に入るのは、水深二〇〜三〇メートルの間。あんまり深いところにはいない。ネ（岩盤）が近くにあるところ。

英輝氏によると、父親というよりも英輝氏が中心になってウミガメの剥製を作るようになった、ということであつた。定置網を大型化したことでウミガメが網に入るようになり、剥製にして飾るようになったという。昔から重宝していたわけではないという。剥製にする前、竹内氏の網では甲羅が何度も網に入り、その甲羅を埋葬している。次に入ったウミガメを剥製にするようになったという。また、よそでウミガメの剥製を見ていたこと、宗教者

がウミガメを放さないで置くようにいったこと、なども影響し、次々と網にかかったウミガメを剥製にするようになったようである。英輝氏の語りをもとに、ウミガメ捕獲の時期を時系列で示すと以下になる。

昭和五〇年（一九七五） 甲羅埋葬。

昭和五三年（一九七八） 最初の剥製（写真9）。

昭和五五年（一九八〇） 二頭目の剥製（写真9）。

昭和五七年（一九八二） 三頭目の剥製（写真9）。占い師に相談。

昭和五九年（一九八四） 十一月一日に捕獲。四頭目。明石で放流したカメ。漁協に寄贈（写真10）。

この間、四頭目、五頭目の捕獲か。

平成一四年（二〇〇二） 息子にあげる（写真11）。

平成一六年（二〇〇四） アオウミガメ。六頭目（写真9・13）。

・竹内英輝氏の家のカメ（ケースの外、床の間側）（写真9・12）

種 アカウミガメ

長さ 七一 cm

幅 六七 cm

・竹内英輝氏の家のカメ（ケースの外、手前）（写真9・13）

種 アオウミガメ

長さ 七七・五 cm

英輝氏の息子の浩義氏（昭和五五年生まれ）にも話をうかがった。

カメがかかるのは一〇月後半ごろが多い。夏網をあけて、冬網を入れる時期に捕れる。水深三〇から五〇メートルぐらいのところにいる。オカから二〇〇間（三〇〇メートル）ぐらいのところ。底建網に入る。幅八間（二〇メートル）、長さ一キロぐらいの網。深くなったところに集まっている。いつも一頭だけ入る。二匹入ってこない。何年かに一回。佐井村中探しても何年かに一回。授かりものだという。五〇年もかけてこれだけのカメしか捕れない。一頭組合に寄付している。三五年ぐらい前から大きい網にした。深いところに入るようになってからカメが入るようになった。オカには寄り付かない感じ。沖で捕る。深すぎるところはだめ。六〇メートルもあると捕れない。最後に捕ったのは二年前の一〇月の中ごろ。四〇センチぐらいのカメ。子どもみたいな感じ。種類は同じ。弟の家にある。

カメは水温が高いときに来る。エチゼンクラゲは今年も一匹入った。今の時期、南から暖流が来る。春になると、太平洋からの潮が来る。クラゲもいなくなる。寒流と暖流がぶつかる時期にカメは乗る。水温が高くなるのは、気温よりももうちょっと遅れる。七月より九月のほうが暖かい。

カメが捕れると組合に連絡する。網は一軒一軒。カメは自分のもの。ほかの家でも剥製にしている。剥製にできる人は青森県でも何人もいない。一番新しいものは津軽で作ってもらった。

宝物だと思っている。カメが捕れば大漁。人が寄り添った網にも魚が乗る。青函連絡船が通っていたころ、自殺者がよく寄ってきた。こういう網には一〇〇パーセント魚が乗った。

カメの揚げ方。いくら魚が乗っていても、魚をかきわけてカメを先に揚げる。縁起物だから真つ先に揚げる。頭から抱きかかえるようにして揚げる。カメは神棚に向けて船首に置く。手を叩いて拝む。カメを捕ったときは丁寧に、どこも傷つけないように、タモではなく人の手で揚げる。そのあとで、魚を汲む。最初に港へ揚げて、みんな集まってきて拝む。背中に酒をかける。家に持ってきて、酒を二升あげる。神棚の真下に置く。神棚の下に置いておるとき、隣の人などが見に来る。神様みたいなもの。拝みに来る。自分たちにも漁が授かるようにという願いをこめて拝む。カメの上に乗るのは許されない。一・二時間したら冷凍する。海に入っていると腐らないが、海水から揚げると腐りやすい。

しけで沖が休みになるとき、剥製にしてもらう。剥製屋は冬場に持ってきてくださいという。冬の寒い時期のほうが美しくできるという。剥製にするのは二週間ぐらいかかる。剥製にできて、一週間ぐらい神棚の下に置く。次の大安の日に二階に上げる。運ぶときも、引き取るときも大安。

一二月五日にエビスさまの祭りをする。海の神の祭り。カメも神様だから一緒に祭る。お酒を置いて、ローソクを立てて拝む。近所の人も必ず二階に上がってカメを拝んでから飲む。今も一二月五日にする。エビス、大黒、カメの三つ膳を供える。人と同じ膳。赤い食器。一年に一回の祝い。海の神様の日。カメがない家では、旗を立てて、飾り物でお祝いする。

カメは個人で祀っているだけで、神社に飾ることはない。

網は一回入れると二・三日置いておく。タイミングよくなければカメは生きていない。カメはほとんど死んでいる。

イルカ、アザラシも入る。たまにクジラも入る。これらはご利益もない。

牛滝の網は佐井村で一番大きい。

浩義氏の説明からは、ウミガメが網に入る時期や水深などの情報が得られた。また、ウミガメを大漁の神として祀る習俗は、竹内家のなかで定着し、浩義氏にも受け継がれていることが分かった。

・竹内浩義氏の家のカメ（写真11）

種 アオウミガメ

長さ 三九 cm

幅 三七 cm

なお、漁協には竹内庄次郎氏が寄贈したアカウミガメの子どもの剥製が飾られている。

・漁協のカメ（写真10）

種 アカウミガメの子ども

長さ 三〇 cm

幅 二八 cm

アカウミガメ剥製（竹内さんの寄贈）に添えられていた説明には以下のように記されている。

アカウミガメ

昭和59. 11. 1 AM 8:00頃 大荒川沖 小型定置網（死亡していた）  
贈 竹内庄次郎

漁協で勤めていた野村義勝氏によると、荒川沖は牛滝から南西へ四・五キロにあり、焼山崎の牛滝側である。牛滝におけるウミガメを祀る習俗について、三六年間、漁協で勤めていた野村義勝氏（昭和四年生まれ）は以下のように語る。

カメは神社に奉納する人はない。昔、神社にあったという話も聞いたことはない。個人で持っている。カメを剥製にするのは竹内氏が最初か。竹内氏の先代がいろいろ歩いて見てきて、カメの剥製はいいもんだと思つてするようになったんじゃないか。

カメは泳いでいるのを見たというのは聞いたことがない。

昔の人はカメのことをガメという。「ガメ寄つてきたけども腐つてた」などというのを聞いたことがある。そのころは定置はなかった。小さいころはカメの話だけ聞いていたが、見たことはなかった。浦島太郎の話しか知らなかったの、浦島太郎が乗つたのはガメなんだろうかと思つたことがある。

オサガメを見たのはカメを見た最初ぐらいか。三〇年ぐらい前か。牛滝の人が捕つて漁港の岸壁に上げて解体していた。剥製にしようとしていたのか。肉を取っていた。浜で食べたんじゃないか。おいしいと聞いたことはない。カメはそれ以来見たことはない。

カメは網にからまっていると動けないので死んでしまう。剥製にしたのは死んだもの。漁師は案外神経質。ずぶといところはずぶといが。カメを叩いて殺したという話は聞いたことがない。

野村氏自身も、五・六センチのアカウミガメの子どもをホルマリンに入れて持っている。打ち上げられていたのを拾ったという。野村氏は冬であったと記憶している。

野村氏は、牛滝で捕獲したウミガメの写真をファイルして所有している。このファイルをもとに話をうかがった。

中西幸一氏の家には小さいウミガメの剥製がある。野村氏は一九九一年二月九日に撮影している（写真14）。中西幸一氏は湾内で漂着していたものを拾ったという。野村氏はヒメウミガメか、と考えている。

中西正氏の家にも大きいカメがある。アカウミガメ。ケースに入っている。野村氏は一九九一年二月九日に撮影している（写真15）。中西正氏は網で捕ったという。

漁協には竹内庄次郎氏が捕ったアカウミガメ以外に、タイマイが壁に飾られている（写真16）。このタイマイは

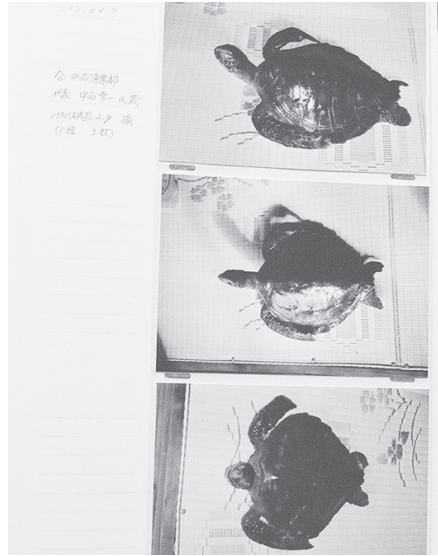


写真 14 中西幸一氏のウミガメ（野村義勝氏撮影）

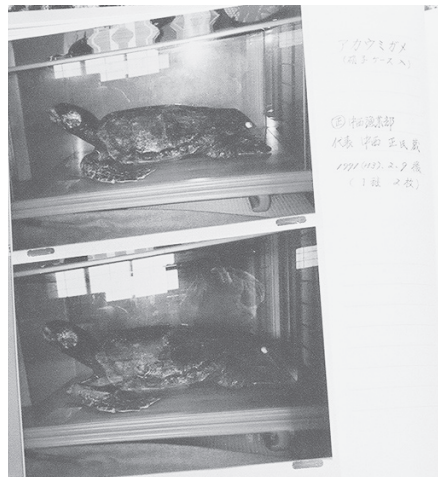


写真 15 中西正氏のウミガメ（野村義勝氏撮影）

坂井長太郎が捕ったものである。野村氏によると、以下のような経緯で漁協に寄贈された。佐井村と脇野沢村との境界にブシドマリという浜がある。その浜に漂着していたのを坂井氏が拾ってきた。自分で中を取って乾燥させてもっていた。家でほこりかぶせて持つておいても、ということとで漁協においてもらうことにした。野村氏はこのカメも写真に撮影している。

このほか、店をやっている坂井氏の家でもタイマイの剥製を所有しているという。

・漁協のカメ（坂井長太郎氏の寄贈）（写真16）

種	タイマイ
長さ	二七 cm
幅	二三 cm

佐井村福浦にもウミガメの剥製を祀る家があることを牛滝で教えてもらった。福浦の事例は『下北半島北通りの民俗』などには見られないものである。

福浦において、少なくとも五軒の家でウミガメの剥製を祀っているとい



写真 16 坂井長太郎氏の寄贈のタイマイ（2005年9月撮影）



写真 17 福浦の集落（2005年9月撮影）

うことを聞いた。このうち、柳田市雄氏の家では、床の間に大小二頭のウミガメを祀っている（写真18・19）。柳田氏にウミガメを祀るようになった経緯をうかがった。

小さいカメは三〇年以上前に網に入った。場所は柳田氏のもので、牛滝の人に場所を貸して建網をした。網を建てて二・三年で入った。カメが乗ってから三四・五年になるか。六月ごろだった。メガネ網に入った。それまではカメは見たことがなかった。上がらなかった。そのときは、二頭乗った。一頭は牛滝へ持って行った。青森で剥製にした。牛滝の人に貸す前から網は建てていた。

カメは海の神様。毎朝、ローソクを立て、お水とご飯を供えて拝む。朝だけ拝んでいる。大漁させてくれと頭をなでて拝む。

大きいカメは二〇年前か。今は全然乗らない。平成になつてからはない。

柳田氏の言葉通りに受け取れば、小さいウミガメを祀るようになったのは昭和四五年（一九七〇）ごろとなる。しかし、柳田氏の息子は、牛



写真 18 柳田市雄氏の家のカメ（2005 年 9 月撮影）



写真 19 柳田市雄氏の家のカメ（2005 年 9 月撮影）

滝の竹内氏のウミガメのほうが剥製にしたのは早かったという。大きなカメの方は昭和六〇年（一九八五）ごろであるという。福浦において補充調査をおこなわなければ、時期を特定し、前後関係を確定することはできないが、今のところは牛滝から広まってきた習俗と考えておきたい。

・柳田氏の家のカメ（小さいほう）（写真18・19）

長さ 八二 cm

幅 七六 cm

・柳田氏の家のカメ（大きいほう）（写真18・19）

長さ 四五 cm

幅 四三 cm

佐井村磯谷の八幡神社にカメの木彫りの像があるという情報を、青森県史編纂室の清野耕司氏からいただいた。平成一七年（二〇〇五）九月、筆者は磯谷の川村昇一氏の案内で八幡神社の木彫りのカメを拝見した（写真21）。このカメは祀っているものではなかった。ただし、磯谷の漁民センターの床の間にはウミガメの剥製を安置し、お神酒をあげていた（写真22）。川村氏によると、このカメは一〇何年前、底建網に入って、剥製にしてセンターに飾ったものという。それ以前も、そのあともカメ



写真 20 磯谷の集落（2005 年 9 月撮影）

が網に入ったというのは聞かない、という。

・八幡神社にあるカメの木造（写真21）

長さ 四〇 cm

頭から尾までの長さ 八〇 cm

幅 三二 cm

・磯谷漁民研修センターにあるカメ

（写真22）

種 アカウミガメ

長さ 九五 cm

幅 八七 cm

『下北半島北通りの民俗』には、佐井村矢越の願掛け岩にウミガメが祀られていると、書かれている（青森県環境生活部文化・スポーツ振興課県史編さん室 二〇〇二）<sup>(3)</sup>。このウミガメは、八幡宮の祭りのときに山車に載せて運行するという。平成一七年（二〇〇五）九月、筆者は現地調査をおこなった。願掛け岩近くに矢越八幡神社がある（写真23）。この神社の境内にウミガメの剥製に乗った浦島太郎像が安置されているのを見出した（写真24）。浦

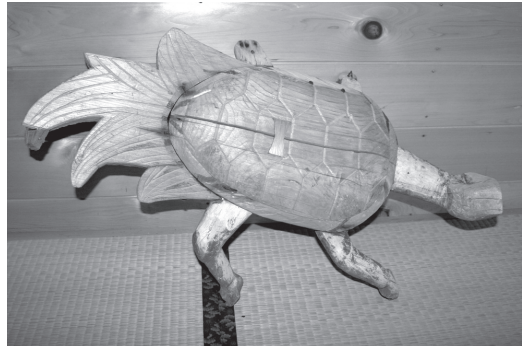


写真 21 八幡神社にあるカメの木造（2005年9月撮影）



写真 22 磯谷漁民研修センターにあるカメ（2005年9月撮影）

島太郎の横には、古いウミガメの剥製も置かれていた（写真25）。八幡神社のウミガメについて、佐井村佐井糠森の館脇博二氏（昭和三年生まれ）にうかがった。

八幡神社の浦島太郎が乗っているカメは網に入ったカメ。青森から来た人がスズキの網を建ててその網に入った。青森に持つて行って剥製にし、ここへ戻した。網主が青森の人だったから青森へ行って剥製にしてもらった。善知鳥神社へ行つて獅子舞を奉納した。カメを迎えるという形で行った。何人かで迎えにいったが、人数の制限があつて、自分は行けなかった。

もともとお祭りには浦島太郎を山車に乗せて祀っていた。海の関係だから。大きい箱を土台にしてカメの形にして乗せていた。たまたま大きいカメが上がったので、本物のカメに乗せるようになった。

もとは浦島もお宮の中に祀っていた。カメに乗せるようになった二・三年あとで別に建物を建てて、その中に置くようになった。お神楽のものもお宮の中に置いていたが、浦島と一緒に移した。これが現在の建物。現在七八歳だが、自分が二〇歳ごろのことだった。お宮を移



写真24 矢越八幡神社の浦島太郎（2005年9月撮影）



写真23 矢越八幡神社（2005年9月撮影）

転したのは昭和十九年か。昭和十九年に予科練の試験を受けた。お宮移転はその年だった。お宮はもともその場所にあったが、下に道路を通してから風が強く当たるようになったので寄せた。カメが上ったのは昭和二二・三年か。戦後には違いない。昭和二四・五年にタラの大漁をした。これに自分も出ている。カメが上ったのは昭和二二・二五年の間か。

小さいカメはその後、磯へ流れ着いた。その後、カメは全然かからない。一〇年ぐらい前、打ちあがったことがある。

（カメの内臓を埋めたという話を聞いたが、という筆者の質問を受けて）崎のところに小さい祠が三つ四つあった。その範囲の中にカメの内臓を埋めた。たしか秋に網に入った。秋だったが、すぐ腐るので内臓を出した。当時の人はいろいろな心配りをした。つながりのあるところへ埋めた。家もその近くにあったし、見晴らしのいい場所だった。埋めたときは、佐井の別当さんが来て墓標を立てた。

佐井村佐井矢越の中村正夫氏（昭和二年生まれ）は、八幡宮の由緒をまとめた『矢越八幡宮建立八十年記念誌』<sup>(4)</sup>という冊子を所有している。この中に、以下のような記述があった。

昭和二十四年

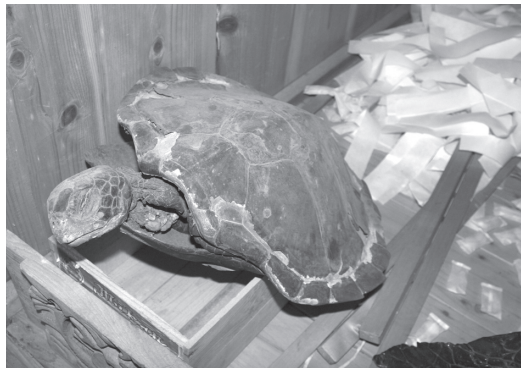


写真 25 浦島太郎の傍らにある小さいカメ（2005年9月撮影）

八月十七日

青森市塩町玉井慶五郎様 矢越前浜の底目鏡網で取れた三十五貫（百三十一・二五kg）の大亀を剥製にして若者会に寄贈された。現在、浦島太郎の乗っている亀が寄贈された亀である。

九月十三日

青森へ亀迎えに水郷丸にて若者会幹部五名と村有志三名、午前九時出発。青森着午後五時。

九月十四日

午前十時より市内運行（漁師町）午後一時より善知鳥神社において亀の魂入れを行う。神主の祈祷後、御神楽奉納。午後五時より玉井慶五郎宅において慰労会を行う。

九月十五日

青森より午後五時頃帰村。宮本専之助宅でお祝する。当時、青森市在住者より寄贈あり。

浦島、人羽織、寄贈。青森市、秋田角四郎様。

浦島神社、長旗、寄贈。青森市、青森警察部長様。



写真 26 佐井の集落（2005 年 9 月撮影）



写真 27 昭和 24 年の善知鳥神社での魂入れ

また、八幡神社にはカメの剥製を迎えるときに青森市の善知鳥神社で撮影された写真が飾られている(写真27)。ここには「昭和二十四年九月十四日 青森市善知鳥神社にて」と書かれている。これらの記録と写真から、矢越八幡宮のウミガメが網にかかったのは昭和二十四年(一九四九)であったことが分かる。

・八幡神社の浦島太郎の乗ったカメ(写真24)  
長さ 約七五 cm

・浦島太郎の傍らにある小さいカメ(写真25)  
長さ 四六 cm  
幅 四五 cm

・エビス祠横のカメの墓標(写真28)  
木柱

高さ 二一五 cm  
幅 九 cm  
奥行き 九 cm

3 大間町

大間町材木の稲荷神社境内の弁天様の祠に、大きなウ



写真 28 エビス祠横のカメの墓標  
(2005 年 9 月撮影)

ミガメの剥製が祀られている、と『下北半島北通りの民俗』に記述がある。三〇年ほど前にイカ釣り漁のときに拾ってきたものであるという〔青森県環境生活部文化・スポーツ振興課県史編さん室 二〇〇二〕。わずか数行の紹介で、写真も掲載されていない。この事例について詳細を把握すべく、平成一七年（二〇〇五）九月に筆者が現地調査をおこなったところ、このカメはオサガメであることが判明した。このカメを祀った和田清三氏は亡くなっておられ、息子の健一氏には会えなかったが、当日おこなわれていた稲荷神社の祭礼に出席していた佐々木文雄氏に話を聞くことができた。

カメはイカ釣りの船が上げてきた。生きたままで上げてきた。半死の状態だった。粗末にもできないし、弁天様としてここへ祀った。それまでは弁天はなかった。建物自体そのときに作った。イカ釣りだったから今ごろだったんでねえか。船の流れを矯正するために落下傘型のソツポを流す。風みたいな感覚で流す。風の強い日なんか流す。このソツポにひつかかっていた。和田清三さんの網にかかった。何艘か仲間と一緒にやっていた。八戸や三沢を基地にしていることも多いため、どこで入ったのかは分からない。カメは剥製にして材木地区のものとして祀った。カメは海で生息しているもんだから粗末にはできない。漁師の神として祀る。「鶴は千年、亀は万年」というし、長生きのことがある。

ウミガメが海を泳いでいるのを見たことはあるが、網に入ったの



写真 29 材木の稲荷神社境内の弁天の祠（2005年9月撮影）

は初めて。小学校の先生が図鑑で調べたところ、暖かい海のカメだということが分った。カメの前に供えてあるのはオストゲ。米の粉で作ったもの。カメに限らず、供える。

同じく神社の祭礼に出席していた佐々木清喜氏は、カメが入ったのは小泊沖ではないかという。

オサガメであるから祀ったというわけではなさそうであるが、オサガメはアカウミガメやアオウミガメに比べて大きく、色も黒いため、漁師たちは特別視することが多い。その後、『青森県史 民俗編 資料下北』には写真が掲載され「青森県史編さん民俗部会 二〇〇七」、筆者も『ウミガメの自然誌』に写真を掲載させていただいた〔藤井 二〇二二<sup>(3)</sup>〕。

・稲荷神社境内

の弁天の祠に祀られるオサガメ（写真30・31）

種 オサガメ

長さ 一三〇cm

幅 八三cm

風間浦村

4 風間浦村

風間浦村蛇浦の



写真30 弁天の祠に祀られるオサガメ  
(2005年9月撮影)



写真31 写真30に同じ（2005年9月撮影）



写真 32 蛇浦の港（2005 年 9 月撮影）

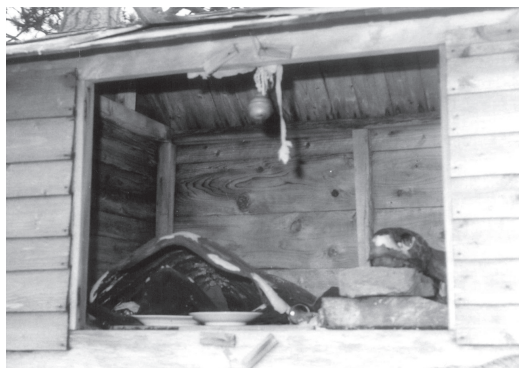


写真 33 『蛇浦の民俗調査報告書』掲載の「亀神社」  
（1986 年ごろ撮影、青森県立郷土館提供）



写真 34 「亀神社」(2005 年 9 月撮影)

五郎太と呼ばれる海岸の岩場の上にカメが祀られている。「亀神社」と呼ばれている。蛇浦の「亀神社」については、『蛇浦の民俗調査報告書』（青森県立郷土館 一九八八）、『風間浦村の神社・仏閣』（澤田 一九九三）、『風間浦村史』（工藤 一九九七）、『下北半島北通りの民俗』（青森県環境生活部文化・スポーツ振興課県史編さん室 二〇〇二）、『青森県史 民俗編 資料下北』（青森県史編さん民俗部会 二〇〇七）に報告が見られる。このうち『風間浦村の神社・仏閣』には、詳細な記述がある。『風間浦村の神社・仏閣』の著書・澤田光夫氏は、昭和三〇年（一九五五）ごろ、古老から聞いた話として、以下のようなことを記している。（筆者要約）

明治三五年ごろから五十洲豊次郎が、この前浜でマグロの網を建てていた。この網にかかったカメがすでに弱っていたので、酒を飲ませることもできず、海に放しても泳ぐこともできない状態のまま死んだので、祠を建てて祀った。これが「亀神社」である。

澤田氏は、「亀神社」の写真の説明として、「明治三十八年に亀を祀ったのが始まりと云われている」としているが、次のページに掲載した同じく「亀神社」の写真の説明に「明治三十六年頃建立されたと云われる祠と亀」とも書いている。建立年代に若干の齟齬が見られるもの、おおよそ明治三〇年代後半にカメが祀られ始めたと考えられる<sup>(6)</sup>。

澤田氏によると、その後、五十洲家は蛇浦から転出したため、五十洲家と関係のあった山本三郎家の先祖が「亀

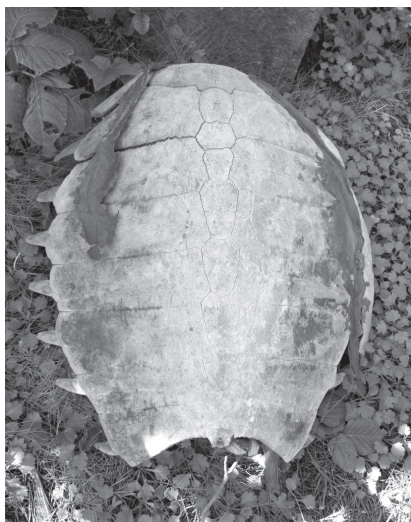


写真 35 「亀神社」に置かれていたカメの甲羅（2005年9月撮影）



写真 36 「亀神社」右横の石碑（2005年9月撮影）

神社」の祭祀をおこなっていた。昭和一四年に山本藤松家が分家し、前浜で網を建てるようになり、「亀神社」の祭祀を受け持ってきた。昭和四五年に山本氏が亡くなってからは、正月や折戸神社の例祭のときに供え物をする程度で、祭祀は簡略になった。

『蛇浦の民俗調査報告書』には、一メートル以上の大きなカメが二頭、もう少し小さなカメが四頭納められている、とあり、掲載した写真からは、祠の中にカメの遺体が二つ、正面を向いて安置されている様子が見える。このうち右側のカメは頭が見えるが、左側のカメは甲羅が見えるだけで、頭は見えない（写真33）。『風間浦村の神社・仏閣』には、祠の中に〇・七メートルから〇・二メートルのカメ六体が祀られている、とあり、掲載した写真からは、祠の中にカメの遺体をそのまま安置している様子がうかがえる。

平成一七年（二〇〇五）の筆者の調査のおりには、カメの骨は散乱しており、はっきり分かる形でウミガメの遺体が安置されている状態ではなかった（写真34）。蛇浦で漁業をしている木下重利氏（昭和三〇年生まれ）に「亀神社」について話を聞いた。

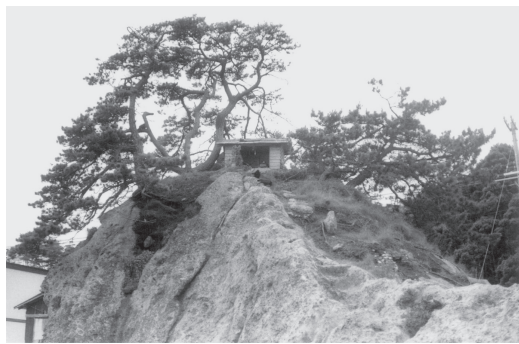


写真 37 「亀神社」の祀られる岩場（1986 年ごろ撮影、青森県立郷土館提供）



写真 38 「亀神社」の祀られる岩場（2005 年 9 月撮影）

「亀神社」を建てたのは宮古の人。大謀網をやっていた。五十洲さん。カメをああいふうに祀るのはもともここにあった風習ではない。「亀神社」では生のままでカメを置いていた。

蛇浦漁業共同組合の山本公明氏も、大謀網をやっていたのは三陸のほうの人であった、という。蛇浦の「亀神社」は、三陸の習俗が持ち込まれたようである。

・「亀神社」のカメ（写真34・35）

長さ 六八 cm

幅 五三 cm

・「亀神社」右横の石碑（写真36）

高さ 五七 cm

幅 四〇 cm

筆者の調査では、「亀神社」以外に、個人の家でウミガメの剥製を安置している家があることが分かった。木下重利氏（昭和三〇年生まれ）の家ではウ

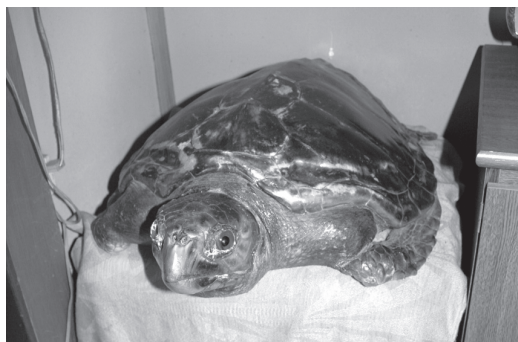


写真 39 木下重利氏の家のカメ（2005年9月撮影）



写真 40 漁協のカメ（2005年9月撮影）

ミガメの剥製を安置している（写真39）。木下氏は次のように語る。

カメを捕ってから二五・六年たっている。底建網に入った。底建網は春から夏。入ったのは夏ごろだったか。窒息して死んでいた。入ったのはバンヤの方だった。折戸の二〇〇メートルほど沖で入った。捨てるのはもったいないし剥製にした。むつで剥製にした。このカメより大きいものが死んで流れていたことがある。だれも拾わなかった。もう一回入ったので剥製にして組合にあげた。

・木下重利氏の家のカメ（写真39）

長さ 六五 cm

幅 六〇 cm

・組合のカメ（写真40）

曲甲幅 七六 cm

幅 七六 cm

5 深浦町

これまでの報告は、いずれも下北半島であり、津軽地方の事例は不明であった。ところが、平成二六年（二〇一四）八月、現地調査をおこなうことにより、津軽地方にもウミガメを祀る習俗が広がっていることを確認することができた。

深浦町ではウミガメを祀る事例は報告がなかった。平成二六年（二〇一四）の筆者の調査では、深浦町深浦の田中昇氏（昭和一九年生まれ）の家でウミガメの剥製を置いているのを見出した。田中氏は漁師をしているが、家は旅館を経営している。旅館の二階の廊下の突き当たりにウミガメの剥製を置いている（写真42）。田中氏にウミガメを置くようになった経緯をうかがった。

四〇年ぐらい前、沖で定置網に入った。秋だった。生きていれば酒を飲ませて放す。昔からそういう習慣がある。今でもそう思うと思う。オカまで持つてくる。縁起がいい。カメは縁起もん。死んでいたもので、海に投げるのはもったいないから剥製にした。弘前へ持つて行ったら、うちではできないと言われて、青森で剥製にした。一〇万ぐらいかかった。飾っているだけ。祀ってはいないが、年越し（二月三一日）に、背中に餅を置いてお供えをする。普段、とくに拝むことはない。ただカメという。これはアオウミガメか。これは大きいほうだと思う。こんなのは見たことない。前に、小さいカメが入ったことがあった。背中にフジツボがいつばいついていた。剥製にしたときはもつときれいだった。お客さんの子どもが来ると、背中に乗っている。祭りに仮装行列が



写真 41 深浦の港（2014 年 8 月撮影）



写真 42 田中旅館のカメ（2014 年 8 月撮影）

出る。そのときに、このカメを出して、担いで浦島太郎をしたことがある。

田中氏は定置網の船頭をしていた。カメはめったに入らない。最近ほとんど入らない。昔はたまにあった。定置網は年中やっている。田中さんは一五年ほど前に定置網をやめた。今は刺し網をしている。

ウミガメを祀っているわけではないというが、大晦日に供え物をしており、神に近い感覚で扱っている。旅館の切り盛りをしている昇氏の妻は、「カメを置いていけると、いいことがある。カメはうちの宝。」と語っていた。

・田中旅館のカメ(写真42)

甲羅の長さ 八五 cm

甲羅の幅 六八 cm

全体の長さ 一二九 cm

6 鰺ヶ沢町

鰺ヶ沢町にもウミガメを祀る習俗の報告は見られない。しかし、鰺ヶ沢町教育委員会主任学芸員の中田書矢氏に問い合わせたところ、町内にウミガメを祀るホテルがあるということが分かった。以前から聞いていたが、調査をしたことはなかったという。平成二六年(二〇一四)、中田氏とともに、鰺ヶ沢町舞戸町のホテルグランメル山海荘を訪れた。このホテルは海を見下ろす丘の上に立っている。ホテルの敷地の一角に、「亀神社」という額が掲げられた祠が建っている(写真44)。祠の中を拝見すると、正面の壁に神棚を挟んで二つのウミガメの甲羅が掲げられている(写真45)。祠に入ってすぐに左側には、「漁獵神璽」と書かれた明治四年の箱(写真46)、同じく「漁



写真 43 鯨ヶ沢の港から山の上のホテルグラン  
メール山海荘を望む（2014 年 8 月撮影）



写真 44 「亀神社」(2014 年 8 月撮影)



写真 45 「亀神社」の正面に掲げられた甲羅（2014  
年 8 月撮影）

「漁獵神璽」と書かれた明治二七年の箱（写真47）が上下に重ねて置かれている。向かい側には「漁獵神社」と書かれた昭和一三年の箱（写真48）、「萬年神社」と書かれた昭和一〇年の箱（写真49）が上下に重ねて置いてある。「漁獵神璽」と書かれた明治二七年の箱と、「萬年神社」と書かれた昭和一〇年の箱の中には、ウミガメの甲羅が入っている（写真50・51）。「漁獵神璽」と書かれた明治四年の箱と、「漁獵神社」と書かれた昭和一三年の箱には何も入っていないかった。つまり、正面に掲げられている甲羅は、明治四年の箱に入っていた甲羅と、昭和一三年の箱に入っていた甲羅と考えられる。

ホテルの取締役会長・杉澤むつ子氏に話をうかがった。<sup>(1)</sup>



写真 47 左下の箱（2014 年 8 月撮影）



写真 48 右上の箱（2014 年 8 月撮影）



写真 46 左上の箱（2014 年 8 月撮影）

浜毛の漁師たちがカメを祀っていた。もともとここにあった。ガメサマといっていた。小さい小屋になっていた。酒盛りするような小屋だった。鳥居は海に向っている。集落から上がってくる参道が付いている。お参りにきたのは浜毛の人だけ。漁師も減っていた。氏子が少なくなつて、維持できなくなっていた。八幡さんに預けようかと言っていた。うちが新しくした。前の社は斜めになつていた。一三年前に亡くなつた夫（先代社長）が「亀神社」の社殿を建て替えた。この土地を買ったとき、同じ大工さんが建てた。「亀神社」としたのは夫。「亀神社」の額は夫が書いた。今はホテルでおまつりをしている。

正月には漁師が参るので開けている。お神酒とお供えが

置かれているので、だれか参っている。浜毛は漁師が多かった。今は漁師をしている人はいない。ホテルがオープンしてから、漁師さんに来てもらって、いっぱい飲んでもらっていた。

四月八日に祭りをしている。神楽。八幡宮の宮司に来てもらう。七日は宵宮。旧暦か。

カメは大謀か何かの網に入ったのか。

網にカメがかかると、一升ビンで酒を飲ませて放した。次の日は大漁だった。

夫は浜毛の出身。古いほうの山海荘には、カメの剥製が置いてある。地元のものではないのでは。きれいにしている。

カメを祀っているといい。

ホテル関係者の八〇歳ぐらいの男性によると、浜毛の海岸に、オトビラという崖になっているところがあるという。オトビラの最先端にカメが祀ってあったという。この男性は次のようなことも語ってくれた。

四月八日は最初のカメが寄った日かもしれない。

カメは生きていれば帰す。祀っているカメは、弱っていたか、死んでしまったか。

カメはたまに上がる。漁師は大切にした。この浜は波が直接ぶつかる。この下は砂浜だった。中村川の河口からずっと砂浜だった。



写真 49 右下の箱（2014 年 8 月撮影）

青森県のウミガメの民俗

・「亀神社」の御神体を入れる箱

左上の箱（写真46）

（正面）

明治四年辛未

漁獵神璽

四月八日

高さ 九三 cm

幅 六七 cm

奥行 二九 cm

左下の箱（写真47）

（正面）

明治廿七年甲午

漁獵神璽

二月八日

高さ 九三 cm

幅 七四 cm



写真 50 左下の箱に入っている甲羅（2014年8月撮影）

奥行 二九  
cm

右上の箱（写真48）

（正面）

昭和十三年

漁獵神社

二月十五日

高さ 七五  
cm

幅 六七  
cm

奥行 二六  
cm

右下の箱（写真49）

（正面）

昭和拾年

萬年神社

浜毛若者一同

高さ 一一三・五  
cm



写真 51 右下の箱に入っている甲羅（2014年8月撮影）

青森県のウミガメの民俗

幅 八〇 cm  
奥行 三四 cm

・「亀神社」の御神体

正面左 (写真45)

甲羅の長さ 七三 cm

甲羅の幅 五八 cm

左下の箱 (写真50)

甲羅の長さ 八五 cm

甲羅の幅 七一 cm

正面右 (写真45)

甲羅の長さ 六七 cm

甲羅の幅 六二 cm

右下の箱 (写真51)

甲羅の長さ 一〇〇 cm

甲羅の幅 七三 cm



写真52 「亀神社」からオトビラを望む (2014年8月撮影)

## 7 つがる市

つがる市牛潟町の高山稲荷にもウミガメが飾ってあったという情報を、五所川原市の工藤篤子氏から教えていただいた。工藤氏は高山稲荷の宮司の家の親戚であったので、子どものころに、高山稲荷に行ったとき、ウミガメを見たという。筆者の調査時に、高山稲荷で確認したが、三〇年から四〇年前に処分して今はないということであった。

## 8 五所川原市

五所川原市の十三は、中世、十三湊として栄えたところである。十三の工藤篤子氏（昭和三五年生まれ）によると、妹が十三の海岸でカメに乗った写真がある（写真53）。昭和三五・六年であるという。工藤氏の父親は写真が趣味であり、当時の十三の風景、生活の様子を写真に残している。

## 9 今別町

今別町袈月の稲荷神社にもウミガメの剥製があることを、青森県史編さん室の福島春那氏から教えていただいた。編纂室で撮影した写真のなかに、ウミガメの剥製が祀られている様子が写っていたという。この情報をもとに、平成二六年（二〇一四）に現地調査をおこなった。稲荷神社のすぐ下



写真54 十三の海岸（2014年8月撮影）

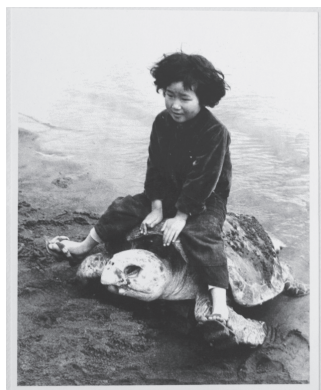


写真53 昭和35・6年に漂着したウミガメ（工藤篤子氏提供）

に住んでいる伊藤勝徳氏（昭和  
一七年生まれ）に話をうかがっ  
た。

神社のカメはだいぶ古い。  
何も聞いていない。子どもの  
ころは、おいなりさん（キッ  
ネの像）が怖くて、めったに  
上らなかった。前から置いて  
いる。ずっと、隅に置いてい  
る。祀っているわけではない。  
い。お供えはしない。

拝殿に置いているが、とくに祀っているわけではなく、また、その由来も知らないということであった。しか  
し、伊藤氏は、襲月の個人がウミガメを祀っていたという事例を教えてください。

カメは個人で祀っている人がいた。小倉昭雄さん。その人の親か、その前の人から祀ったか。寄ってきたの  
か、海から拾ってきたものか知らない。授かりものという感じで祀っていた。最初は家の中で祀っていた。家を  
新築してから、外に建て物を建てて祀った。伊藤さんは中を見たことはない。伊藤さんよりも一〇歳ぐらい上の



写真 55 襲月の集落（2014 年 8 月撮影）

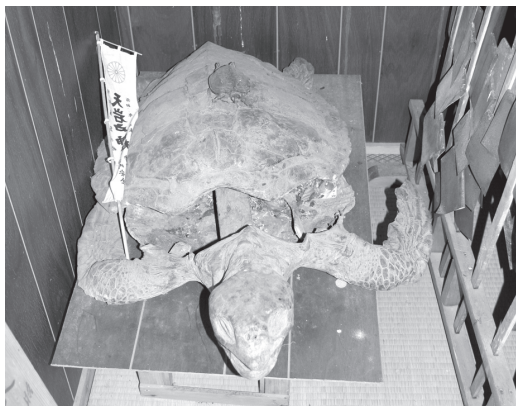


写真 56 稲荷神社のカメ（2014 年 8 月撮影）

人だった。鍛冶屋さんと漁師をしていた。亡くなる前に、おいておけないということで、カメを海へ流した。船で海へ出して流した。一〇年ぐらい前だった。亡くなって五・六年たっている。

伊藤氏の語りから、今別町にも個人でウミガメを祀っていた人がいたことが分かった。ただし、現在は海に流してしまい、祀っていない。

・稲荷神社のカメ（写真56）

甲羅の長さ 六三 cm

甲羅の幅 五三 cm

1 青森県におけるウミガメの民俗の特徴

青森県では、ウミガメをめぐる民俗として、流木の習俗、見世物、放流習俗、甲羅・剥製を祀る習俗が確認された。

流木の習俗とは、ウミガメが持っていた流木を拾い上げるというものである。寛延二年もしくは宝暦七年には、八戸の船頭がウミガメからもらった流木を用いて観音を祀っている。明和五年には、弘前の左官が現在の深浦町においてウミガメを助け、その後、ウミガメがもって来た珍しい木を持ち帰った。いずれも江戸時代の事例である。しかし、民俗事例としては、ウミガメから流木をもらうという習俗は報告されておらず、筆者の調査でも確認できなかった。

青森県ではウミガメの産卵がないため、ウミガメに出会うこと自体が珍しい。したがって、江戸時代にはウミガ

メを城下へ運んで見世物にすることもあった。

網にかかったウミガメに酒を飲ませて放す習俗については、県内各地で確認できる。おそらく、県内全域に広がっていた習俗と思われる。ただし、中道等が報告しているような、ウミガメの背中に「南無阿弥陀仏」の文字を朱書きして放すという事例は珍しい〔中道 一九二五〕。

網にかかって死んでいたウミガメの甲羅を祀る習俗がある。甲羅を祀る習俗は、鰺ヶ沢町において確認した。明治初期から昭和初期にかけて祀った「亀神社」が存在している。風間浦村ではウミガメの遺体を祠に安置する「亀神社」があった。これは、明治末期に祀られたものである。このほか、死んだウミガメを剥製にして祀る習俗も各地に見られた。津軽では深浦町・今別町、下北半島では脇野沢村・佐井村・大間町で確認できる。大間町材木の稲荷神社にはオサガメの剥製が御神体として祀られている。このように、地域の神社に御神体として剥製が祀られる場合もある。また、漁民の家に祀られる場合も多い。深浦町・今別町・脇野沢村・佐井村・風間浦村では漁民の家の床の間などに祀られる事例がみられる。祀るといふ感覚がなく、飾るといふ意識で剥製を置いている場合もある。それでも、正月や祭りのときに供え物をしたり、灯明や水を供えたり、頭をなでたりする習慣がある場合もみられた。こうした場合は、単なる飾り物ではなく、やはり祀るといふ心意が認められる。剥製にしたウミガメの内臓を埋葬して墓標を立てたという事例はあったが、青森県では死んだウミガメを埋葬して供養するという習俗は確認できなかった。

## 2 全国的な位置づけ

青森県ではウミガメを捕獲して食用にする習俗は確認できなかった。ウミガメを食用などに利用する地域は、ウミガメとの接触機会が多い地域である。青森県はウミガメの産卵が見られない地域であり、浜辺でウミガメに出会

うことはない。青森県の近海でもウミガメは回遊しているが、南から暖流に乗ってくるウミガメに出会う機会は限られている。したがって、ウミガメの食用習俗が定着することはなかったと考えられる<sup>(8)</sup>。

反対に、ウミガメに出会うことが珍しいために、ウミガメを縁起物として、あるいは神として祀るという習俗が広まっている可能性が高い。ただし、死んでいたウミガメを祀る習俗として全国的に広まっているのは、埋葬して供養する習俗である〔藤井 二〇一四 a〕。青森県では遺体を埋葬して供養する習俗は確認できない。この点は青森県の特徴である。死んでいたウミガメの甲羅や遺体を祀るという習俗が存在する地域は全国的にみれば限られている。甲羅を祀るのは兵庫県豊岡市・新潟県新潟市・同県佐渡市、遺体を祀るのは愛媛県今治市、剥製を作って祀る習俗は鳥取県湯梨浜町・山形県遊佐町・同県酒田市ぐらいである〔藤井 二〇一四 a〕。愛媛県今治市を除けばすべて日本海側の地域である。「亀神社」という名称は、香川県・岩手県で確認できるが、こうした事例も限られている。カメの内臓を埋葬して墓標を立てたという事例も、ほかにはみられないものである。

酒を飲ませて放す習俗は、鹿児島県奄美大島より北に広く分布している。青森県の事例は、北限に近いと思われるが、県内全域に濃密に分布しているようである。しかし、背中に「南無阿弥陀仏」を朱書きして放すという習俗は、全国的にみても和歌山県田辺市で明治時代におこなっている事例を確認した以外は見出していない<sup>(9)</sup>。

カメから流木をもらう習俗については、香川県・和歌山県・静岡県・宮城県で江戸時代に拾われた流木が残っている〔藤井 一九九九・二〇〇〇・二〇一三 c・二〇一四 b〕。この習俗は、船乗りが拾う場合と、漁民が拾う場合に大きく分かれる。船乗りは海上安全のために拾うが、漁民は大漁祈願のために拾っている。流木の近くには魚群がいることもあるため、漁民の民俗知識といえよう。船乗りの場合には、仏典に出ている「盲亀浮木」の言葉が知られるようになり、ウミガメが持っている流木を拾い上げるとよい、という認識が広まったと考えられる。青森県の場合は、漁民が拾い上げた事例はない。八戸市の事例は船乗りが拾っており、深浦町の事例は弘前の左官が

拾ったものである。

このほか、カメから海の宝物をもらうという事例も各地に存在している。宮城県七ヶ浜町には、江戸時代にウミガメの背についていたオウムガイをもらい、現在も宝物として所有している家がある〔藤井 二〇一三a〕。また、カメを助けたことで、お礼にカメに助けてもらうという報恩説話も各地に存在する。ただし、カメの報恩説話は、南西諸島から西南日本を中心に分布しており、海で遭難したときにカメに助けられる、という内容のものが多く〔藤井 二〇一三c〕。弘前の左官が拾った流木は、船乗りや漁民が海上安全や大漁祈願で拾い上げた事例というよりも、カメを助けたことでお礼に宝物をもらったという報恩説話という性格が強いように思われる。

### 3 民俗の伝播と変化

青森県の事例は、ウミガメの民俗にとつて、北限に近いものである。当然ながら、ウミガメの生息状況に影響を受けて、この地域の民俗も展開している。しかし、習俗の伝播や、習俗の変化も考えておかなければならない。

流木の習俗については、江戸時代の船乗りによる伝播が考えられる。八戸市の事例は船乗りである。筆者が確認したなかでは、今のところ最も古い事例である。<sup>(19)</sup>この船頭が「盲亀浮木」という文字の知識以外に、具体的にカメの流木を拾い上げたという話を聞いていたのかどうかは分からない。その後、各地で流木を拾い上げた人物として漁民が多いが、江戸時代や明治時代の事例には船乗りも多数いる。<sup>(11)</sup>北前船などの船頭を介して、この習俗が広まっていったことが推測される。ここで注目しておきたいのは、明和五年に弘前の左官が向かった場所である。彼は、鳥井崎でカメを助けたあと、深浦の親戚の家で滞在している。深浦という地域は、北前船の寄港地として栄えた港町であった。八戸の流木の話などは当然ながら知られていたのではなからうか。明和のできごととしては、八戸の例は一切書かれていない。江戸時代は津軽藩と南部藩に分かれていた地域であるため、八戸と弘前の間で頻繁

な行き来はなかったと思われる。また、弘前の左官が拾い上げた木が霊木として評判になっていく過程で、八戸の船頭と同じである、という説明は必要のない情報であった。しかし、文献に書かれていないからという理由で、弘前の左官が八戸の事例を一切知らなかったとは断定できない。深浦において、カメから流木をもらったという内容の話を聞いていたために、帰り道でカメと流木を発見し、流木を持ち帰った、という可能性も考えられる。

ウミガメの甲羅や遺体を祀る習俗については、日本海側に分布することを述べた。ウミガメが網にかかって死んでいる場合、打ち上がって死んでいる場合、甲羅や遺体を持ち帰って祀るという心意は自然発生的に起こることもあると思われる。ただし、それを「亀神社」と呼ぶことは、伝播してきた可能性が高い。風間浦村の「亀神社」は三陸から伝播したといわれている。岩手県宮古市から来ていた大謀網の網元が祀り始めたという。三陸にはたしかに「亀神社」が分布している。しかし、三陸の「亀神社」は、石碑や石の祠であり、遺体を祀った祠は見当たらない〔藤井 二〇一三c〕。つまり、三陸の「亀神社」という名称と、日本海側で甲羅や遺体を祀る習俗が習合して形成された民俗と考えることもできる。かつて、三陸の「亀神社」は、船乗りが伝播させた可能性があることを指摘した〔藤井 二〇一三c〕。鰺ヶ沢町に、風間浦村よりも古い明治四年の「亀神社」があることは、船乗りによる「亀神社」の伝播の可能性を想起させる。鰺ヶ沢も深浦と同様、北前船の寄港地として栄えた港町であったからである。このように、各地のウミガメにまつわる習俗が伝わってきて、地元で自然発生的に起こった習俗と習合することが考えられる。

地元で発生した習俗が、宗教者や知識人によって、神格化されていく場合もある。宮城県七ヶ浜町において、江戸時代に「亀霊神社」が発生した事例も、宗教者が関与していた〔藤井 二〇一三a〕。二章では、弘前の左官がカメからもらった木については、宗教者ではないが、当時の公家・幕府・諸大名の間でもてはやされ、次第に霊木化していったことを考察した。民俗事例では、佐井村牛滝の竹内家のウミガメは、青森の宗教者に見てもらって、

親子だから一緒に祀るように、と言われたという。このように、青森県においても、宗教者や知識人の影響で、ウミガメからもらった木や、ウミガメの剥製が神格化されていった場合がある。鱈ヶ沢町の「亀神社」については、漁民の祭祀をホテル経営者が受け継いだことで、ウミガメ祭祀が衰退せずによりがえったという事例になる。

また、下北半島でウミガメの剥製を祀る習俗が広まっている背景には、昭和五〇年代から定置網が大型化したことが影響しているようである。大きな定置網を設置することで、ウミガメが網にかかる回数が増えたという。今までめったにかからなかったウミガメが定期的に網に入るようになり、ウミガメを剥製にして祀る習俗が発生している。佐井村牛滝は、剥製を祀る習俗のひとつの中心地と考えることができる。剥製にする技術はどこにでもあるものではない。剥製の技術者を紹介してきたのも牛滝の漁民であった。定置網にウミガメが入って死亡する回数が増え、剥製にして祀ることで大漁をしたという話が伝わり、剥製にする業者を紹介することで、ウミガメを剥製にして祀る習俗は下北半島に広まっていったと考えられる。

おわりに

弘前の左官が拾った木は、削られてなくなったのであろうか。中道等と同じように、どこかに残っているようにも思われる。津軽ではなく、東京・京都、あるいは水戸などで保管されている可能性もある。当時、相当に評判になったというため、江戸時代の文献をさらにたどることで、その後の行きついた先を探り当てられるかもしれない。

また、筆者はいまだに北海道に渡ったことがない。北海道ではウミガメの民俗はどのような分布、展開をしているのであろうか。マンボウの捕獲や、食用後のマンボウの皮を流す儀礼などは、アイヌと東北地方に共通している点がある。ウミガメの民俗には、アイヌとの共通点はないのであろうか。

さらに、下北半島の剥製を祀る習俗は今後どのような展開をしていくのかも気にかかる。筆者の調査は十分ではなかったが、補充調査というのではなく、今後の変化を見つめていくことも重要であると思っている。

以上のように、青森県のウミガメの民俗については、今後とも考えていかなければならないことが多い。

(注)

(1) 本文に引用する『津軽編覧日記』の文章は、弘前市立弘前図書館にて閲覧した『津軽編覧日記』と、『解説本 津軽編覧日記 八』の翻刻を突き合わせ、筆者が一部修正したものである。

(2) 「津軽の海村」は未公刊自筆資料であり、『民俗編 資料 津軽』に収録されている〔青森県史編さん民俗部会 二〇一四〕。

(3) 佐井村の大字佐井の中に、字として矢越がある。糠森も字のひとつ。

(4) 『矢越八幡宮建立八十年記念誌』には、「矢越部落会」、「昭和六十二年四月七日 旧三月十日」と記されている。

(5) NHKの「ダーウィンがきた」第三九七回「大西洋縦断！世界最大のウミガメを追え」(二〇一五年二月一日放送)において、筆者への取材をもとに、日本におけるオサガメを祀る習俗が取り上げられた。山口県阿武町・万寿寺の「亀地藏」、千葉県銚子市の川口神社のオサガメの絵馬とともに、大間町材木・稻荷神社のオサガメについても紹介された。大間町のオサガメは、筆者撮影の写真が放送された。

(6) 『蛇浦の民俗調査報告書』では、「今から三十年ほど前に大綱をしていた五十州豊次郎氏が打ち上げられた亀をここに納めるようにしたのが始まりという」としている。この記述に従えば、この調査がおこなわれた昭和六一年から三〇年前の昭和三十一年ごろに祀られ始めたということになる。『下北半島北通りの民俗』では、

この報告をふまえて、祠を建てたのは昭和三〇年ごろで、五十洲豊次郎氏が打ち上げられた亀をここに納めるようになったと記している。しかし、その後刊行された『青森県史 民俗編 資料下北』では、『風間浦村の神社・仏閣』の記述をふまえて、祠を建てたのは明治三五年ごろに蛇浦でマグロの大謀網漁をしていた五十洲豊次郎であると修正している。時系列的に詳細に説明していることから、『風間浦村の神社・仏閣』、および『青森県史 民俗編 資料下北』の記述のほうが正確であると考えられる。

(7) 浜毛は鰺ヶ沢町舞戸町の中の地名である。

(8) 和田干蔵は、一度ウミガメの解剖したことがあるといい、「肉は相当多くなまぐさい臭気があつても煮ると臭みなく食べられた」と書いている〔和田 一九五七〕。一般的ではないが、明治から昭和時代の青森県においてもウミガメを食べるということもあつたことがうかがえる。佐井村牛滝では、竹内英輝氏の語りにあつたように、戦前に南方に行った人の中にはウミガメを食べた人がいるといい、英輝氏がカメを剥製にした際には、剥製屋からカメの肉を食べないかとの提案があつたという。また、野村義勝氏の語りにあつたように、牛滝では昭和後期にもウミガメを食べることはあつたらしい。

(9) 『牟婁新報』明治四四年六月三日の記事に、「四十八貫の亀」という見出しで以下のような話が掲載されている。串本方面で生け捕りにしたウミガメを田辺の江川で入札したところ、田辺のある庵主がこのカメを殺すのは残念として五円でカメを買収した。庵主は持ち帰ったカメの甲羅に「南無阿弥陀仏」と朱書きをし、自分の名前も書き添えて放そうとした。町内の有志も若干の金を払って甲羅に記名し、カメを大八車に載せて海へと運び、浜から海へと放した。

(10) 江戸時代の事例としては、寛政の初め（一七八九年ごろ）に徳島県鳴門市付近で漁民が拾った事例〔藤井 一九九九〕、天保九年（一八三八）に和歌山市雑賀崎の漁民が拾った事例〔藤井 二〇〇二〕、などがある。

(11) 慶応三年(一八六七)に兵庫県北部の但馬沖で流木を拾い上げたのも、香川県の北前船の船頭であった。

(参考文献)

青森県環境生活部文化・スポーツ振興課県史編さん室編 二〇〇二 『青森県史叢書 下北半島北通りの民俗』 青

森県

青森県史編さん民俗部会編 二〇〇七 『青森県史 民俗編 資料 下北』 青森県

青森県史編さん民俗部会編 二〇一四 『青森県史 民俗編 資料 津軽』 青森県

青森県文化財保護協会編 一九五六 『みちのく双書 一 永祿日記』 青森県文化財保護協会

青森県文化財保護協会編 一九五九 『みちのく双書 七 津軽歴代記類』 青森県文化財保護協会

青森県文化財保護協会編 一九六七 『みちのく双書 二二 平山日記』 青森県文化財保護協会

青森県立郷土館編 一九七八 『青森県立郷土館調査報告三 民俗二 陸奥舟岡の民俗調査報告書』 青森県立郷土

館

青森県立郷土館編 一九八八 『青森県立郷土館調査報告三 民俗二 蛇浦の民俗調査報告書』 青森県立郷土

館

青森県立図書館編 一九六九 『谷の響』 青森県立図書館協会

青森県立図書館青森県叢書刊行会編 一九五一 『津軽俗説撰』 青森県立図書館青森県叢書刊行会

「角川日本地名大辞典」編纂委員会編 一九八五 『角川日本地名大辞典 二 青森県』 角川書店

川島秀一 二〇〇四 「東北地方太平洋岸のウミガメの民俗」『東北民俗』三八

工藤睦男編 一九九七 『風間浦村史』 風間浦村

- 澤田光夫 一九九三 『風間浦村の神社・仏閣』 風間浦村教育委員会
- 田口理恵・関いずみ・加藤登 二〇一一 「魚類への供養に関する研究」『東海大学海洋研究所研究報告』三二
- 中道等 一九二五 『津軽旧事談』 郷土研究社
- 名古屋市博物館編 二〇〇二 『盛り場 祭り・見世物・大道芸』 名古屋市博物館
- 西崎正孝編 二〇〇〇 『ふかうら風土記』 深浦町老人クラブ連合会・青森県老人クラブ連合会
- 日本随筆大成編輯部編 一九七九 『日本随筆大成 別巻 一話一言 六』 吉川弘文館
- 畑山信一訳 二〇〇七 『解説本 津軽編覽日記 八』 私家版
- 弘前市立弘前図書館編 一九七〇 『弘前図書館蔵郷土史文献解題』 弘前市立弘前図書館
- 深浦町編 一九八五 『深浦町史年表 ふるさと深浦の歩み』 深浦町
- 藤井弘章 一九九八 『ウミガメの墓—和歌山県内の事例報告—』『和歌山県立博物館研究紀要』三
- 藤井弘章 一九九九 『ウミガメと流木にまつわる漁撈習俗』『エコソフィア』四
- 藤井弘章 二〇〇〇 『ふるさとの歳時記 一四 ウミガメと流木』『ニュース和歌山』二〇〇〇年五月一日
- 藤井弘章 二〇〇一 『地域差と時代差からみたウミガメの民俗—海村・離島追跡調査から—』『成城大学民俗学研究所紀要』二五
- 藤井弘章 二〇〇三 『海洋民研究における環境民俗学的視点—増尾伸一郎ほか編『環境と心性の文化史 下 環境と心性の葛藤』勉強出版
- 藤井弘章 二〇〇五 『知多半島のウミガメ埋葬・供養習俗』『名古屋民俗叢書 四 生活環境の変化と民俗』
- 藤井弘章 二〇〇八 『対馬・壱岐におけるウミガメの民俗 —亀トの里とウミガメ—』『民俗文化』二〇
- 藤井弘章 二〇〇九 『動物食と動物供養』『人と動物の日本史 四 信仰のなかの動物たち』吉川弘文館

藤井弘章 二〇二一 「隠岐・山陰沿岸のウミガメの民俗『民俗文化』二三

藤井弘章 二〇二二 a 「山口県のウミガメの民俗 ―長門地方の祭祀・供養習俗を中心に―『民俗文化』二四

藤井弘章 二〇二二 b 「民俗 ヒトとウミガメの関係史」亀崎直樹編『ウミガメの自然誌』東京大学出版会

藤井弘章 二〇二二 c 「ウミガメにまつわる報恩説話と禁忌伝承」『万葉古代学研究所年報』一〇

藤井弘章 二〇二三 a 「江戸時代におけるウミガメ祭祀の成立過程 ―宮城県七ヶ浜町の伝承と新出資料の比較

を通して―』『近畿大学大学院文芸学研究科紀要混沌』一〇

藤井弘章 二〇二三 b 「愛知県のウミガメの民俗『名古屋民俗』五九

藤井弘章 二〇二三 c 「東北地方太平洋沿岸のウミガメの民俗 ―東日本大震災後の追跡調査を踏まえて―『民

俗文化』二五

藤井弘章 二〇一四 a 「日本列島のウミガメ供養習俗『動物考古学』三一

藤井弘章 二〇一四 b 「静岡県のウミガメの民俗 ―御前崎市・伊東市における一五・六年前の調査をふまえて

―『民俗文化』二六

脇野沢村史調査団編 一九八三 『脇野沢村史 民俗編』脇野沢村

和田干蔵 一九五七 「亀の話『俳誌 十和田』昭和三二年二月（和田干蔵 一九八〇『青森県の博物集成』青森

大学出版局 に再録）

# （付記）

深浦町では、田中昇氏に話をうかがい、田中旅館・宮本満氏（深浦町歴史民俗資料館館長）のお世話になった。  
鰺ヶ沢町では、杉澤むつ子氏に話をうかがい、中田書矢氏（鰺ヶ沢町教育委员会主任学芸員）・ホテルグランメー

ル山海荘のお世話になった。五所川原市十三では、工藤篤子氏に話をうかがい、琴湖園のお世話になった。今別町では、伊藤勝徳氏に話をうかがい、今別町教育委員会のお世話になった。このほか、青森県史編纂グループ民俗部会事務局の福島春那氏・弘前市立弘前図書館にもお世話になった。津軽の調査は平成二六年（二〇一四）八月におこなった。

佐井村では、川村昇一氏・竹内キヨ氏・竹内英輝氏（佐井村漁業協同組合副組合長）・竹内浩義氏・館脇博二氏・田中豊衛氏・中村正夫氏・野村義勝氏・柳田市雄氏に話をうかがい、佐井村教育委員会・福寿荘のお世話になった。大間町では、佐々木清喜氏・佐々木文雄氏に話をうかがい、大間町教育委員会・能戸操氏・和田健一氏のお世話になった。風間浦村では、亀谷重一氏・木下重利氏・山本公明氏（蛇浦漁業共同組合主任）に話をうかがい、宮下賢治氏（風間浦村教育委員会）のお世話になった。このほか、青森県史編纂室の清野耕司氏にもお世話になった。下北半島の調査は、平成一七年（二〇〇五）九月に、科学研究費補助金若手研究（B）「ウミガメをめぐる食と祭祀についての民俗学的研究」（研究代表者…藤井弘章）においておこなったものである。

なお、（ ）の中は、調査当時のものである。

また、写真については、注記のない限りはすべて筆者の撮影である。